

書評

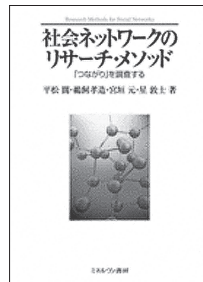
『社会ネットワークの研究・メソッド ——「つながり」を調査する』

●平松 関・鶴飼 孝造・
宮垣 元・星 敦士 著

(ミネルヴァ書房, 2010年, A5判, 228頁, 2,940円)

●石黒 格

(日本女子大学人間社会学部准教授)



本書は、実際にネットワークを調査してきた研究者が、自らが用いてきた理論と調査法を豊富な具体例とともに紹介するという、画期的な1冊である。ネットワークという概念に魅了され、調査的な方法でその深淵に分け入ろうとする研究者にとって、大きな手がかりを提供するだろう。

本書は4名の著者が、各1部を担当して異なる方法論を紹介する。第一部では、通常の計量調査の延長として、回答者と関係のある他者との社会関係(パーソナル・ネットワーク)を調査する方法であるネーム・ジェネレータ法が紹介され、サポートや社会意識との関係が明らかにされる。第二部では、特定の集団内部の社会関係を対象として、関係の全体構造(ホール・ネットワーク)を記述するための理論と方法が紹介され、大学に入学した学生たちの人間関係形成の過程が記述される。

以上の2部が、いわゆる量的調査に基づいているのに対して、続く第三部、第四部は質的な方法が紹介されている。第三部では、ネットワークが生成され、課題解決へと機能していく過程としてネットワーキングという概念を取り上げ、そのダイナミズムに肉薄する質的な方法が紹介される。阪神・淡路大震災時に活躍したNPOを題材に、もともと資源や技能を有し、一定の活動を行っていた個人が連結することにより、連結なしでは不可能だった活動が可能となり、効率的な問題解決がなされた姿が活写される。第四部では、多くの個人が互いに情報を提供しあう社会として情報ネットワーク社会を捉え、インターネットをはじめとする情報技術の発展が、そうした社会を支えている姿を論じている。いずれも、ネットワークの形成と変化、そしてそれらが生み出す社会的な事象を、当事者の意図や行動までを含めて包括的に検討するのに優れた視点であり、方法だと言える

だろう。

これら具体的な研究事例だけでもネットワーク研究の魅力を伝えるのに十分なのだが、本書では具体的な方法が丁寧に紹介されていることが大きい。それも、ネットワーク分析の数学的、計量的な技法といった内容ではなく、もっと具体的な方法である。第一部と第二部では、実際の調査に用いられた質問紙が掲載されているし、第三部では、調査の企画からフィールドでの聞き取り、そして結果のフィードバックまでの一連の過程が詳細に説明されている。これらは、現場で調査に関わった者にしか手に入らない貴重な情報である。読者、特に初学者がネットワーク研究に挑むとき、大きな手がかりとなるだろう。

以上のように、本書は有益な情報を多く含む良書であるが、1つ事実誤認を指摘したい。第一部で、郵送法によるネーム・ジェネレータ法は、森岡清志氏を中心とした研究グループによって2000年に初めて実施されたとされているが、これは正しくない。筆者の知るかぎりでも、1988年に「家族以外でもっとも親しいと考える人」について尋ねる郵送調査を大谷信介氏を中心としたグループが行っている(大谷, 1995)し、より本格的なネーム・ジェネレータ法も、池田謙一氏を中心としたグループが1997年に実施している(Ikeda and Huckfeldt, 2001)。先駆者の名誉のために、ここで指摘しておきたい。

文献

Ikeda, Ken'ichi and Robert Huckfeldt, 2001, "Political Communication and Disagreement among Citizens in Japan and the United States," *Political Behavior*, 23 (1): 23-51.

大谷信介, 1995, 『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク——北米都市理論の日本的解説』ミネルヴァ書房。

書評

『よくわかる質的社会調査 技法編』

●谷 富夫・芦田徹郎 編
(ミネルヴァ書房, 2009年, B5判, vi+224頁, 2,625円)

『よくわかる質的社会調査 プロセス編』

●谷 富夫・山本 努 編
(ミネルヴァ書房, 2010年, B5判, vi+235頁, 2,625円)

● 間 淵 領 吾

(関西大学社会学部教授)



評者の記憶が正しければ、社会調査士制度の草創期には、質的社会調査に携わる人々から「質的社会調査は定型的な教育が難しい」という意見があった。質的社会調査における定型化は量的社会調査とは異なるのかもしれないが、定型化は可能はずだし、教育するからには定型化すべきでもあるに違いないのに、質的社会調査とは不思議なものなのだなぁ、と思った記憶がある。

編者の1人である山本は、『よくわかる質的社会調査 プロセス編』(以下、『プロセス編』と表記)の「あとがきに代えて——質的調査の意味と学び方をめぐって」で、質的調査は量的調査を実施する土台にもなること、質的調査のセンスは量的調査でも活かされることを述べた後、次のように述べている。

質的調査のすぐれた作品を多く読んで質的調査の面白さ、質的調査ならではの切れ味を知ることとはとても重要です。実際、多くの人はこのようにして質的調査を勉強してきました。しかしながら、このような「作品から学ぶ」という学び方では、それらの作品をどうやって作ったかというプロセス(舞台裏、仕事の仕方)はわからないということになります。

『プロセス編』は、日本人社会学者による日本社会についての調査体験に基づき、まさにこのプロセスを示すことを目的に編まれた初めての教科書であるとのことである。『プロセス編』で示されたプロセス(舞台裏、仕事の仕方)は、個々の質的社会調査による作品が産み出された過程だが、それらを定型化した面もある。編者らの努力によってこのような教科書が出版されたことは、実に喜ばしい。本書に刺激を受けて、質的社会調査のプロセスを定型化することについて議論が盛り上がることを期待したい。

『よくわかる質的社会調査 技法編』(以下、『技

法編』と表記)は、第1部「社会調査法概説」(社会調査の意義と目的、質的社会調査の考え方)、第2部「調査技法——質的データの収集」(フィールドワーク、参与観察法、ワークショップ、インタビュー)、第3部「分析技法——質的データの分析」(ライフヒストリー分析、会話分析、内容分析、質的データのコンピュータ・コーディング、質的データ解析支援の方法論)、第4部「質的調査の現場」(調査の企画、データ素材の収集、データの作成、論文執筆、質的調査の応用、質的調査と調査倫理)という構成となっている。

『プロセス編』は、第1部「質的社会調査概説」(質的社会調査の方法と意義、古典の紹介、社会調査のタイポロジー)、第2部「問いをたて、技法を選ぶ」(「良い問い」の作り方、先行研究の調べ方、調査技法の選び方など)、第3部「現地に入り、記録する」(フィールドへの入り方、調査対象者とのコンタクトの取り方、インタビューの仕方、フィールドノートの書き方、インタビュー記録の仕方、静止画像・動画の撮り方など)、第4部「データを処理して、報告書を作成する」(インタビュー記録や映像資料の利用方法、報告書の書き方、調査倫理の重要性とジレンマなど)という構成となっている。

『技法編』と『プロセス編』は、社会調査士標準カリキュラムFに対応しており、専門社会調査士標準カリキュラムJでも活用可能であり、『プロセス編』は、Gにも対応しているとのことである。両著とも量的社会調査について学ぼうとする者にも参考となる点が多い。

『技法編』の編者の1人である芦田による「あとがきに代えて——星の王子さまとアンケート」は、質的・量的を問わず、社会調査に関わる全ての者が読むべき一文である。